

日本橋における非日常空間への回帰 Return to extraordinary space in Nihombashi

佐藤信治¹, ○横畑佑樹²
Shinji Sato¹, *Yuki Yokohata²

People often go to travel and amusement parks to enjoy special experiences while living their daily lives, such as work, school, housework, etc. Life is made up of such "normal" ordinary and "special" extraordinary circulation. The existence of extraordinary life makes you feel that your daily life is more important; if you become accustomed to extraordinary life and lose its freshness, the balance of life will be disturbed. It is important.

Extraordinary spaces have changed over time, and once farming was mainstream, traditional entertainment such as festivals clarified the boundary between daily and extraordinary spaces. It has become a device that creates extraordinary space, and the extraordinary space has expanded, and SNS has become widespread in the present age, and what has been felt as an extraordinary space is now familiar. "Overflowing in extraordinary space" blurs the boundary between extraordinary space and everyday space. In addition, there was always nature next to life in Japan, and it was an everyday life, but in modern times, urbanization has progressed, and nature has gradually disappeared. Things that were ordinary until now make you feel extraordinary.

"Nihombashi" on the planned site was a logistics base in the Edo period and flourished as a key point for water transportation, and many people interacted and a community was formed at the base of the bridge. There are different special spaces, and the bridge itself is an extraordinary space, which can be said to be the starting point of a theme park. It is used as a road, the upper part is covered with the Metropolitan Expressway, and the landscape is also bad. In addition, once-prospered water traffic has declined, Japan's character and extraordinary space have been lost, and aging infrastructure and the loss of nature are also serious issues. By reverting nature back to the city, we will develop a green infrastructure that clarifies the boundary between extraordinary space and everyday space, and as Nihombashi was once the origin of the theme park, Plan the construction of extraordinary space to regain the modern Japanese style.

1. はじめに

人は仕事や学校、家事など普段の生活を送りながら、時々旅行や遊園地に行き、特別な体験を味わう。そういった「普段の」日常と「特別な」非日常の循環によって生活が成り立っている。非日常が存在することで日常がより大切なものを感じる事ができる。非日常に慣れ、その新鮮さを失うと生活のバランスが乱れる。そのため、非日常と日常の境界線を明確にすることは重要である。

非日常空間は時代によってその姿を変えている。かつて農作業が主流だった時代では祭りなど伝統的な娯楽によって日常空間と非日常空間の境界を明確にしていた。さらに、工業化により、テーマパークが非日常空間を演出する装置に変わり、非日常空間が拡大した。そして、現代において SNS が普及し、今まで非日常空間と感じていたものが当たり前のように身近に存在している。しかしその「非日常空間で溢れている」ということが非日常空間と日常空間の境界線を曖昧としている。

また、かつて日本の生活の傍にはいつも自然が存在し、

日常そのものであった。しかし、現代では都市化が進み、自然は次第に姿を消していった。自然の価値観が変化し、今まで日常だったものが非日常を感じさせる。

計画敷地の「日本橋」は江戸時代の物流拠点であり、水上交通の要としても栄えた。その中で多くの人々が交流し、橋の袂にはコミュニティが形成された。そのため、日常とは異なる特別な空間が存在し、橋自体が非日常空間であり、テーマパークの原点ともいえる。この地では日常と非日常が入り混じりながらもその境界は明確化されていた。しかし、現在は単なる道路として利用され、上部は首都高速道路で覆われ、景観も醜悪になっている。また、かつて栄えていた水上交通も衰退し、日本らしさや非日常空間が失われている。さらに、インフラの老朽化や自然の喪失も深刻な課題となっている。そこで情報化社会から切り離された自然を都市へ回帰させることで非日常空間と日常空間の境界を明確化したグリーンインフラを整備する。そしてかつての日本橋がテーマパークの原点で

1: 日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

2: 日大理工・学部・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

あったように、この日本橋で現代の日本らしさを再び取り戻す非日常空間の建築を計画する。

2. 計画背景

2.1 非日常の転化

近年、スマートフォンやメディアの普及に伴い、日常的に情報が飛び交うようになった。日常空間と非日常空間が混ざり合いながら非日常空間は日常空間に転化し、その境界線がなくなってしまった。境界線が引けなくなったことで、本来の非日常的体験の大切さが薄れている。

2.2 日本らしさの喪失

明治時代以降、経済的繁栄の中、欧米文化の浸食によって「日本らしさ」の精神が失われている。グローバル化によって技術が進歩している一方で、祭りや行事のような日本らしい非日常的な行為が衰退している。また、かつて日本の街の要素には鎮守の森や里山のような自然的な非日常空間が内包されていた。ところが近代の都市化によって自然が減少し、鎮守の森や里山といった日本的な非日常空間が街の要素から消滅している。

2.3 遊園地の衰退

近年、遊園地は衰退の一途をたどっている。1980年代頃に続々と開園した遊園地。しかし、1990年代頃からその姿が徐々に消えていった。日本全国の遊園地・テーマパーク数は2001年の247か所から2017年の129か所と減少している。その要因として、レジャーの多様化が挙げられる。かつては余暇=遊園地やテーマパークであったが、現在は趣味やレジャーの多様化によってさまざまな遊戯施設が存在するため、相対的に利用者数が減っている。

2.4 インフラの老朽化

高度経済成長期に集中的に整備されたインフラは今後急速に老朽化することが懸念されている。そして、今後20年間で、建設50年を超えるものが加速的に増えていく。このように老朽化するインフラを早急に整備することが求められている。

3. 計画敷地



Figure 1. Planned area

3.1 日本橋エリアの現状

かつての日本橋は五街道と海運の起点であり、現在も7本の主要な道路がここを起点としている。そのため全国から様々な物産が集まり、活気があった。しかし、明治時代に入ると日本橋は洋式に建て替えられ、周辺の都市景観も変化していった。また、戦後に舟運機能が衰退し、親水空間は不要なもののみなされた。それ以降、河川は汚染されていった。さらに現在では日本橋川の水辺に近づくことができず、賑わいを感じる場所がなくなっている。

4. 基本計画

4.1 非日常へ回帰させる遊戯施設

衰退の一途をたどる遊園地やテーマパーク。遊園地の閉鎖の理由として「アクセス性」と「新鮮さ」によるものが大きい。そのため日本橋の交通を生かしつつ、常に変化する仮設性の高い遊戯施設を提案する。

また、入口と出口が存在し、敷地の中にアトラクションがある従来のテーマパークとは違い、街を巻き込んだ新しいタイプのテーマパークを計画する。本計画では、木造の橋を架けることで遊戯施設拠点を創出する。また、日本的なデザインのストリートファニチャーを点在させることでかつての非日常空間を演出する。

4.2 日本本来の非日常を取り戻す

日本らしさを取り戻し、非日常と日常を明確にするため、江戸の街並みを蘇らせる。木を基調とした建築を構成し、非日常空間であった鎮守の森や里山のような自然を再び取り入れることで非日常と日常の循環を再生する。

4.3 グリーンインフラによる再生

我が国はインフラの老朽化という課題に直面している。そこでインフラという下部構造を表に出すことで、人が活動する空間と一体的に計画を行う。また、近年、自然に対する意識の変化によって、緑を重要視する兆しが見え始めている。そこで自然の浄化作用を生かしたグリーンインフラを都市へ挿入することで、オープンスペースを創出し、再び日本橋にかつての活気を取り戻す。

また、日本古来の浄化作用を持った日本庭園を現代の都市に応用する。インフラとしての機能だけでなく、レジャー的要素として非日常を街に潜める。

5. 参考文献

- [1]日本橋地域ルネッサンス 100年計画委員会 HP
<https://www.nihonbashi-renaissance.com/>
- [2]国土交通省「余暇活動の充実」
<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/transport/shouwa62/ind000101/004.html>
- [3]経済産業省 HP
<https://www.meti.go.jp/index.html>